
月の光と葵の乙女～短編集～

三好八人衆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の光と葵の乙女〜短編集〜

【Nコード】

N1411Y

【作者名】

三好八人衆

【あらすじ】

時は戦国。現代日本からやってきて徳川家に仕える鷹村聖一は、戦だけではなく日常也大忙し!?

そんな彼の日常や、色々な武将のお話を気軽な気持ちでご覧ください
い!

※時々投稿していた月の光と葵の乙女の番外編をこちらに纏めてみました。今度からこちらで『月の光と葵の乙女』の日常を描いていきます。

（服部半蔵正成編）

三河国の大名徳川家での『月の使者』鷹村聖一に与えられた主な役目は『軍師兼祐筆兼弓部隊指揮官』というものである。ちなみに祐筆とは秘書の様なもので、文章の代筆などが主な仕事。

今日も今日とて聖一は主君徳川家康が武田家に送る文章の代筆を終え、岡崎城の廊下をフラフラと歩いていると――

「・・・道に迷った」

岡崎城内は思ったよりも広く、いつの間にか来た事がない場所まで来てしまっていた。人の気配はなく、あまり使われていない区画のようだ。

「戻ろうか・・・」

仕方がないので、踵を返そうとした時――

コトン・・・

「ん？」

何かの物音が耳に入り、振り返る。しかし相変わらず廊下には誰もいない。ということは・・・

（部屋の中に誰がいる・・・って事になるけど）

どうやらこの区画は物置の様なところらしく、普段は誰もいないはずだ。仮に誰かがいたとしてももう少し物音がするはずである。

（泥棒・・・か？）

だとすれば徳川家の禄を食む者として看過しておくわけにはいかない。脇差を手に取り、勢いよく扉を開く！

「誰だっ！――えっ・・・？」

その部屋の中に入った瞬間――聖一は腕を取られたかと思うと宙を舞い、床に叩きつけられる。

「――動くな」

叩きつけられた痛みを味わう間もなく、首筋に冷たいものが当てられる。それが刃である事はぶつけられる殺気から察する事は出来た。

見上げる先には鋭く、隙のない目つきをした少女の姿があった。そしてその少女の上半身は、ほぼ100パーセント肌が露出していた。「何者だ」

その少女の鋭い双眸が、聖一を捕らえて離さない。始めてこんな至近距離で『殺気』をぶつけられ、聖一は凍りついたように口が動かない。

（殺される！？）

本気で死を覚悟したその時――

「聖一さん？」

ガラスと扉を開けて現れたのは、この城の主徳川家康。彼女は抑えつけられているこちらを見比べて、ボツと顔を赤らめた。

「あ、あの・・・半蔵？」

「い、いえ殿、これは、その違うんです・・・」

こちらを抑え込んでいる少女が、慌てたように家康に対して抗弁する。その慌てた声を聞いて聖一は冷静になって今の状況を分析してみた。

1..上半身裸の少女が男の自分を押さえつけている。

2..人気のない部屋。

3..2人は口づけできそうなほど顔を近づけている。

4..現れた家康は何か勘違いをしている

その『勘違い』――それが何となく理解できた聖一は、まず少女に服を着るよう告げる。こちららも頬を赤らめた少女が拳を振り上げ――ゴンツと鈍い衝撃音とともに、聖一の意識は闇に沈んだ。

（あ、意外と大きいんだ・・・）

「服部半蔵正成。徳川家の隠密頭をしている」
はっとりはんぞうまさなり

意識を回復させた聖一に、家康から促された少女はこちらを睨みつけながら名乗った。

「聖一さん、半蔵の正体は私の他には鳥居親子しか知らないからあまり言わないでくださいね」

「はい。分かりました」

それにしても家康はスレンダーな体つきをしており、半蔵も服の上からは家康と大差ないが意外と着痩せするようだ。

「おい、鷹村・・・貴様、いま邪な事を考えただろう」

「いや、そんな事ないです」

「？」

めっちゃ睨んでくる服部半蔵——ものすごく恐かったが、家康はキョトンとしていた。

く服部半蔵正成編く（後書き）

簡単な登場人物紹介

はっとりまさなり

服部正成

この作品では隠密頭として登場するが、史実では伊賀忍者だったのは父の服部保長で自身は甲冑を着て一部隊を率いる武将だった。この作品では忍者として登場。通称は半蔵。

家康に絶対の忠誠を誓う『くのいち』で敵勢の偵察や斥候を得意としている。黒い髪の毛を適当にバサバサに切っているが、髪質はいらしくお姉さん役の鳥居元忠からは『長くしたら綺麗なのにもったいない』と言われている。着痩せするタイプらしい。

〱織田信長編（上）〱

尾張国でいま最も勢い猛き者——織田信秀の嫡子信長は長身で乱雑に切った紅の髪の毛と同色の瞳が特徴の美女であるにもかかわらず、その辺の悪童が着るような粗末な着物で街を取り巻きとともに練り歩き、野山を駆け回る野生児、常識を知らぬ無法者——として『うつけ』と呼ばれ、将来彼女が名将信秀の後を継ぐ事に不安を覚えている家臣も数多くいた。そんな彼女は今日も今日とて取り巻きと相撲を取った後、取り巻きのひとりである乳兄弟めのと（同じ乳母の母乳で育った者の事）の池田勝三郎がこんな話題を提供した。

「生駒いこまのかぐや皇子だあ？」

「はいっ、姐御。丹羽郡小折に屋敷を構えている生駒家宗はご存知でしょうか？」

「ああ、馬借屋の・・・」

生駒家当主・生駒家宗いこまいえむねは灰・油の商売と馬借で富を築き、屋敷を構えた土豪で尾張国ではなかなか名を知られている存在だった。

「そうです。その家宗の息子が教養に富んだ大層な美男子で、各方面から婿入りを求められているのですが、家宗は断る一方だそうで・・・」

「ああ、それで『かぐや姫』・・・いや男だから『かぐや皇子』かなかなか上手いことを言うやつがいるもんだな」

愉快そうに笑った信長とその取り巻きたちだが、ふと、彼らの姐御は笑いを引っ込めて思案顔になったかと思えば、ニヤリと笑った。その笑みを確認した彼らは即座に理解した。『また何か企んでるな・・・』と。

「よっしゃ、お前らついてこい！」

「どこに向かうんで？」

立ち上がった信長に追従した勝三郎達に「決まってるだろ」と当たり前のように言い放った。

「生駒屋敷だ。皇子サマの顔を拝みに行こうじゃねえか」

生駒屋敷は高い堀に囲われ、深い堀も備えた小さな砦くらいの規模だった。この屋敷の最奥には小さな庵があった。

「若様〜！」

「どうしたんだい、藤吉郎？そんなに慌てて」

その庵にこの屋敷に仕える少女・木下藤吉郎があわてた様子で飛び込んできた事に、庵の主は少しも慌てた様子は見せなかった。

パタパタと世話を任されている主のもとに駆け寄り、その顔を見た藤吉郎は毎度のことであるが、『この人ほんとに男なんだろうか？』という疑問を持つ。

病弱であり外に出ないため、日焼けの跡が一分もない肌。優しく、穏やかな顔と口調。サラサラと肩まで伸ばされた綺麗な黒髪。布団に入っていて今は隠れているが、柳のような細い腰。

彼こそ巷で『かぐや皇子』と呼ばれる絶世の美男子・生駒吉乃である。

「若様、『尾張のうつけ』をご存知ですかっ!？」

「ああ、この間話してくれた織田信長殿の事でしょう？」

写本をしていた『平家物語』を閉じ、脇に退かせる。病に倒れて以降、これが彼の唯一といってもよい——いや、許された趣味であった。

「そ、その信長殿が我が屋敷にやってきて、殿に若様に会わせろと・
・・」

「私に？信長殿が？」

信長は『うつけ』として有名であるが、それと同じくらい『女殺し』としても有名であった。数多くの側室を抱える父の信秀が嘆くほどの女好きで、男との浮いた話は皆無だとか――
(私に何の用だったのだろうか?)

「あいたたた・・・あの怪力親父め・・・」

屋敷の主人の愛息である吉乃が小首をかしげていたころ、信長とその取り巻きたちは生駒屋敷から文字通り放り出されていた。

「まさか姐御が猫掴みされて放り出されるとは思ってたんですね・・・」

「まったくだ・・・あとお前らはやくどけ！重いんだよ！」

生駒家宗によって信長の上に積み重ねられていた取り巻きたちは、姐御の怒声に慌てて上から退く。やっと信長のすぐ上に乗っていた勝三郎が退くと、信長は舌打ちをして叩き出された生駒屋敷を睨みつける。

「生駒の怪力親父がああまでして守ろうとする息子・・・ますますお目に掛けたくなっただぜ」

「噂では京の山科言継卿やましなときつぐも娘の夫に、と自ら訪れたこともあるとか・・・」

「ほー、あの山科卿が・・・」

くらのかみ内蔵頭山科言継は朝廷の財政一切を任された責任者であり、各地の大名などとの広い人脈を持ち、なおかつ蹴鞠・和歌・医療など各方面の才能にあふれた優れた人物だった。

以前にも尾張国を訪れ、織田信秀とその家中に蹴鞠や和歌の伝授を行って天皇の即位式の為の献金を確約させた事があった。

また気さくな人柄で、持ち前の医療の知識を駆使して皇室や公家はもちろん庶民にまで診察し無理に治療費を取らなかったため、庶民からも人気のある公家である。

「ふーん……ますます気になるなあ……」

「姐御……?」

地面に胡坐で座り込み、腕組みをしてなにやら考え出した信長。その様子に勝三郎は嫌な予感がした。

（姐御がこれをした後に叩きだされた答えがまともなものだった事はないんだけど……）

「勝三郎！ 帰るぞ！」

「は、はいっ！」

しかし意外にも信長はその歩みを那古野城なこやに向けた。慌てて追従する勝三郎達は本当に彼女が城に戻るのか信じられないでいたが、城の門をくぐり、待ち構えていた信長の守り役である平手政秀ひらてまさひでの憤怒の表情を確認した時、はじめて姐御が本当に城に帰ることにしたんだと確信した。

「うるせーんだよな……爺は」

蒸し風呂の中で、湯気にまみれて一日の汗を流しながら信長はぼやいた。平手政秀の説教は長時間に及び、しかもそれが信長への愛情溢れるものだから邪険にもできない。

「それにしても気になるな……かぐや皇子」

なぜだか、自分は彼に会わなければならぬ気がする。彼女の勘がそう告げていた。

その夜―――那古野城主・織田信長の姿は生駒屋敷の前にあった。
全身を黒装束に包んだ怪しい姿で。

「よし・・・そんなじゃ行くか」

信長は懷から鉤爪がついた縄を取り出し、遠心力を利用して兵に鉤爪を引っ掛ける。縄を頼りに空堀を突破し、堀を登って音もなく生駒屋敷内に忍び込む。

「確か、屋敷の奥にある庵に住んでるんだったな・・・」

物陰に隠れて見回りの兵士から逃れながら、勝三郎が手に入れた生駒屋敷の地図を月明かりに照らして確認する。

潜入した地点が偶然にも庵に近かった場所らしく、奥の方に窓から僅かな明かりの灯った建物が見えた。

「あれが、皇子サマのお住まいか・・・」

庵はどこにでもありそうな、人ひとりが暮らすような粗末な小さな造り。溺愛しているという父の家宗の意向ではない事は明らかだろう。ということは一――

「なかなか質素なものが好きなのらしいな」

なんとなく好感が持てた信長は、フツと笑みを浮かべて呟いた。

「さて、皇子サマに夜這いを仕掛けに行くか」

「うん・・・？」

燈籠の明かりを頼りに『源氏物語』を読んでいた吉乃は、微かに聞こえた気のする物音に顔を書から離した。

「誰か・・・いるの？」

枕元に置いてある刀を手に取り、ゆつくりと物音のする先——土間へ歩みを進めた。同年代の少年と比べて線の細い感の否めない身体だが、刀の腕ならその辺の強盗に負けない自信がある。

「駄目だなあ」

「っ！だれ・・・！」

ふと背後に気配が現れ、簡単に刀を奪われて腕を後ろ手に取られた吉乃は叫ぼうとするがその口も防がれ、そのまま引きずられて布団に押し倒される。

そして、2人は初めて顔を合わせた。

——胸が高鳴った。少年を押し倒した信長は、確かに自分の胸が高鳴った事を自覚した。

（な、なんだよおい・・・なんでこんなに落ち着かないんだ！？）

異性となら胸にサラシを巻き、裸同然の恰好で遊んでいても恥じらいなど覚えた事のない自分が、肌を一切露出させていない格好なのに、なぜか彼を前にすると緊張する。

心臓はやかましく音を立て、顔は熱を帯びる。彼女にとって初めての経験だった。

吉乃は突然の侵入者の手から逃れようとバタバタと暴れるが、力が強く、抜け出せない。薄明かりの中でボンヤリと侵入者の顔は見えた。

——女だ。野性的な美女が口をふさいでこちらを組み敷いている。
「ん・・・むうつ・・・やあっ・・・」

このまま何をされるのだろうか。世間知らずな吉乃には想像もつかず、恐ろしかった。

殺されてしまうのか。それとも、人買いに売られて甲斐の鉱山に送られてしまうのだろうか。

——実のところ、彼の想像は全て裏切られた。
「んうつ!？」

手が放されたと思ったのもつかの間。吉乃の唇に、侵入者の唇が重なった。

(あ、あれ・・・オレ、何してんだ・・・?)

至近距離には驚愕の為だろう、見開かれた彼の瞳。自分もなぜこんな事をしたのかがわからない。羞恥に頬が熱を帯び、目を閉じて、彼を抱き寄せる。

「
・
・
・
ほえ?
」

〱織田信長編（上）〱（後書き）

生駒吉乃（1528?～1566）

史実では、尾張国の豪族・生駒家宗の娘。正式な名前は『お類』であるようだ。織田信長の母・土田御前の一族・土田八平次（どたやへいじ）に嫁いたが、夫が戦死した後、生家の生駒家に戻っていたところを信長に見初められて彼の側室になる。信長の嫡男である信忠をはじめ、信雄・徳姫（徳川家康長男・信康の室）を生むが、最後の子・徳姫を生んだ後の産後の肥立ちが悪く、亡くなった。若き日の豊臣秀吉が彼女（というより生駒家に?）に仕えており、彼女の伝手で織田家へ仕官したという説あり。信長最愛の女性であったという。

彼女が産んだ子・名前・待遇・享年など様々な異説があり、戦国時代の他の女性同様、謎に包まれた人物である。彼女の家は生駒本家として尾張徳川家に仕えた。

この作品では、絶世の美男子として登場する。身体が弱く、一日の大半を写本や読書をして過ごす、剣術の腕前はそこそこ。

なかなかの天然ぶりで、信長を振り回したり、やきもきさせるのだろう・・・か？

（織田信長編（中））

織田弾正忠家嫡子・信長の結婚式は、那古野城で盛大に行われた。
上座には花嫁である信長とその夫となる生駒吉乃。

「ふふ、あの野生児が一目惚れした男はどんなやつかと思っておつたが・・・生駒家のかぐや殿ならば致し方なし、か」

「黙ってる！クソ親父！」

信長が頬を真っ赤にして花嫁らしからぬ罵声を浴びせた人物は、彼女の父・織田信秀であった。すでに四十の坂を登ろうかという彼だが、戦焼けした顔にはまだまだ衰えは見えない。彼の重臣で信長の守り役である平手政秀はすでに酒がまわっているのか、真っ赤な顔で「めでたい」を連呼している。

「ククク・・・照れるな、我が娘よ。婿殿よ、今日はめでたいのう」しかし、はじめて織田家の面々と出会った吉乃にもわかってしまっていた。この宴があまりめでたいものではないという事を。そして信秀が半分の意味でしかめでたいと思っていないことを。

信秀の正面に座る信長によく似た少女は、信長の妹・信行のぶゆき。末森城主である彼女は、家中では文武に明るくしかも信長と違って礼儀正しいと評判で、後継者を信長から変えてはどうかという声も上がっているという。

それを抑えているのは政秀であり、信秀であった。ただ、信長の味方はこの2人だけ・・・

いや、今日から変わる。政秀・信秀、そして吉乃だ。

（信長殿が一方的に私を守ってくださいるんじゃない。私も信長殿を信じ、お守りしなければ・・・）

新婚初夜を迎えた身分のある夫婦は、寢所に入る前にそれぞれ乳母から身体のしくみ——現代風に言うなら保健体育の授業——を受けるという。

「よろしいですか、吉法師様。殿方の身体とは——」

「そそそ、そんな事までするのか・・・!?」

乳母からの説明を受けた信長は大赤面。「あう」「うう」とか襖の前で躊躇している姿に、別部屋から廊下の信長を盗み見ていた乳母は「あの吉法師様がすっかり乙女になって・・・」と感涙していたとか・・・

（ええい、あいつはオレのモノなんだ!）

よくわからないが意を決した信長は、勢いよく襖を開いた。部屋にはすでに敷かれてある大きめの布団、そしてキョトンとこちらを見つめる夫の姿があった。

「ま、待たせたな!」

「・・・? いいえ、特に待ってませんよ?」

信長の無駄に大きな声に小首をかしげながら吉乃は答える。事実、彼も先ほどこの部屋に入ってきたばかりだ。それよりも、吉乃が首を傾げたため、彼のサラサラの黒髪が星空のように煌めいた。その光景と彼の『キョトン』顔に、自分の顔が熱くなることを自覚する。
(うう、この天然ジゴロめ!)

自分は大層彼に惚れているみたいだ。それが何だか悔しくて、心の中で理不尽に吉乃を罵る。

彼はふと表情を引き締めると、「信長様」と彼女に告げた。

「あなた様には、これから先色々な苦難が待っているでしょう。でも、僕はあなたに一生ついて行きます」

「吉乃・・・」

「愛しています、信長様」

彼からの初めての口づけは軽く触れるくらいの短さだった。

「吉……だ。2人でいる時は、そう呼んでくれ」

「分かりました……吉」

2人は先ほどよりも深い口づけを交わし、そして2人は――

信長と吉乃の結婚後、織田家と西の今川家の間で三河国を巡る抗争がさらに激化していった。

信長の父・信秀は美濃国の斎藤道三と同盟を結んで三河国攻略を目指し、三河の重要拠点・岡崎城の城主・松平広忠まつだいらひろただを屈服させようと策を練るが、今川家に属する広忠は義理堅く、なかなか寝返ろうとはしなかった。

窮余の策として、今川家に人質として送るはずだった広忠の一人娘・竹千代を奪って広忠に服属を求めたが、それでも彼は降らなかった。

「やれやれ……広忠殿の義理堅さにも困ったもののよ」

「殿、娘はいかがいたしましたでしょうか？ 殺しますか？」

家臣の問い掛けに「ふむ」と無精に伸びた顎髭を撫でながら、信秀は少し考えて告げた。

「いや……何かの役に立つかもしれない。寺にでも預けておけ」

「御意」

――しかし竹千代が『信秀』の役に立つ事はなかった。

信秀は竹千代を人質に取った後に、三河國小豆坂で今川軍軍師・太源雪斎げんせつさいを総大将とする今川軍に決戦を挑むが、大敗を喫して三河おける影響力を失い、さらにその直後に信長の異母兄・信広の守る安祥城を攻略させれて、信広は今川軍の捕虜となってしまう。

結局人質交換として竹千代と信広はそれぞれもとの勢力のもとに戻された。しかし、信長と竹千代は一緒に遊ぶ中で友情を深めていっ

た・・・

しかし、織田家の家運はこの大敗を機に急速に傾いていった。

信秀が病で没すると、信長に対する風当たりが急速に強くなっていく。そんななかで、後を継いで当主になった信長の味方は家臣ではただ一人、平手政秀だけであつた。だが、その政秀も結婚後も奇行が改まらない信長を諫める為、自害してしまう・・・

政秀が死んだ日、信長は吉乃の胸の中で泣いた。それは、信長が初めて人前で見せた涙だつた・・・

しかし、当主・織田信長は泣いてばかりはいられなかつた。尾張を早急に纏めるべく動き出す。

信秀が生きていた頃から尾張の覇権を奪わんとしていた守護・斯波氏を擁する清洲城の織田信友を、主家筋にあたる斯波義統しばよしむねを殺害した事を大義名分として信長は叔父の織田信光おだのぶみつと結んで信友を滅ぼして清洲城を奪い、居城とした。

しかし、尾張は未だ治まらず。信秀・政秀が抑え続けていた反信長派が妹・信行を擁して末森城で挙兵したのだ。

「これ以上、姉様に国をお任せするわけにはいかない。父様の後を継いで、私が尾張を守ります」

『ははっ!』

末森城に集った反信長派の家臣たちの前で、信行は国盗りを宣言すれば―――

「妹よ・・・国は守るものじゃない。攻め取るものなんだよ」
清洲城で、憂いを帯びた表情で信長は呟く。
ここに、織田姉妹による尾張争奪戦は幕を開いたのである。

〱織田信長編（下）〱

清洲城を本拠にした信長は、それまでの居城・那古野城を今回の篡奪劇の協力者だった叔父で守山城主の織田信光に任せた。

しかし――その信光は何者かによって暗殺されてしまう。信行派による暗殺が疑われるなか、信長が後任として城主に任じたのは・

・

その日、あるひとりの男が当主に呼ばれて緊張した面持ちで出仕してきた。主君から影で『骸骨』と呼ばれているほど頬骨が出て痩せ気味のこの男の名は林佐渡守秀貞^{はやしざとのかみひでさだ}。かつては平手政秀とともに当主信長の後ろ盾だった人物だ。だが、いまは信長の器量に疑問を抱き、信行派に属している。

（わしが信行様擁立に動いている事は信長の殿もご存じの事・・・まさか殺されはしまいが、何の用事であろうか）

「おう、佐渡。久しいな」

「は、ご無沙汰しております」

当主の間には上座に信長、そのすぐそばには彼女の夫である生駒吉乃がいた。他に家臣の姿は見当たらず、武にさして長けているわけでもない秀貞だが、襖の裏に刃をきらめかせた者がいないことぐらいは感じることはできた。

「早速用件を言おう。那古野城の事だ。あの城が尾張防衛の要である事は説明するまでもなからう？」

「無論でございます。織田家重臣としまして、あの城の防衛の任にあたるは経験豊富な信光殿を置いて他にないと思っておりますが・
・・」

秀貞がそう言うと、信長はニヤと笑った。

「いいや、おるぞ。誰だと思うか？」

「は・・・？柴田殿・・・でしょうか。それとも佐久間殿・・・？」
彼が首をかしげながら家中でも武に秀でた将の名を挙げていくが、主君は「違う」と首を振る。

「あまりオレを煩わせるな、佐渡・・なぜ己の名が出てこぬ」

「え・・・わ、私でございますか!？」

目を見開いて驚愕する秀貞。まさか自らの名が出てこようとは夢にも思わなかったのである。

「そうだ。お主は織田家筆頭家老の家柄・・何も不思議な事はあるまい？」

たしかに自分は代々織田家に仕える筆頭家老林家の当主だ。しかし自分は目の前の主君を倒そうとしている者の一味で、それは彼女も知っているはず。

まさかの事態に咄然とする秀貞は、「さっさと城に入れよ」と言つて部屋を去った信長に対し、「主命なれば仰せのままに・・・」と返事をするのがやっとであった。

『林佐渡、那古野城主に任命さる』——この報は瞬く間に尾張国中に広まった。動揺した信行派は『秀貞は信長派に走ったか』と疑い、また秀貞もこの空気を察して信行居城・末森城から距離を取

った。

離間の策に成功した信長は、さらに有力家臣である佐久間兄弟を味方につけることに成功した。ここに至り、危機感を覚えた信行派は自派の引き締めを図るため佐久間兄弟の討伐を決意。柴田勝家を大將に稲生^{いのう}へと軍を進めた・・・

^{しばたかついえ}

柴田勝家。通称を権六^{ごんろく}といい、先代信秀から仕えてきた猛将である。

信行の後見人でもあった彼は、信長の奇行に頭を悩ませている家臣の一人であった。織田家を憂う彼は、『勘十郎様こそが織田家を守りたてていく方だ』と考え、信長排斥に加わっていた。

そしてこの日も、何を血迷ったか信長方に付いた佐久間信盛らを討つべく佐久間軍が砦を構えた稲生に軍を進めた。

そして——思い知った。

（信長の殿は、『うつけ』などではない——我らが、あのお方の器量を図るには小さかっただけという事か・・・）

こんこんと湧く水を、小さな升で受けきることはできない。すなわち、湧き出る水は信長の才。小さき升は自分たちの器の大きさを表す。

勝家は自分の眼前で突如現れた信長軍に蹴散らされていく我が軍に、認めざるを得なかった。

（信長の殿こそ、尾張を統べるお方）

後に北陸五ヶ国を統べ、主君のもとでその名を天下に轟かす柴田修理亮勝家が信長陣営の軍門に降るのにそう時間はかからなかった。そして勝家が軍門に降るのと前後して信行は討たれ、尾張は信長のもとで統一されていくのであった・・・

それから数年後。尾張を統べ、東海の雄・今川義元を桶狭間に葬った織田信長の姿は稲葉山城——否、彼女が新たに名づけた『岐阜城』の天守閣にあった。

彼女の目の前に広がるのは、戦火から新たに復興して行く城下町の姿——次に進んでいこうとする町民の姿だ。

「そうだな・・・吉乃。お前との約束を果たさなきゃな・・・」最愛の夫が死んで一年が経った。元々結婚前から体が弱かった吉乃は、妻が天下を制する足掛かりを築く前に病に斃れた。

最期の日、2人きりになって最後に交わした約束を信長は胸に刻み込んだ。

『ねえ、吉・・・僕はキミが天下の争乱を治めてくれる人だって信じてるよ』

『な、何言ってやがんだ・・・』

唐突に話し出した吉乃に、信長は戸惑いを隠さずに『いいから早く治しやがれ、馬鹿』と罵った。

『病人の世迷言じゃないよ・・・初めて会った時から、『この人は

ただの人じゃない』っていうのは何となくわかったんだ』

彼の笑みは幾度も観てきた。でも、ここまで彼は儚い笑みを浮かべる人だっただろうか？

『ね、吉。僕と最期に約束して』

『約束？』

ここまで話し続けて疲れたのか、深く息を吸って『約束』の内容を話した。

『もう二度と戦火で悲しむ人が出ない国を作って。キミならそれができるって僕は信じてるから・・・』

彼が息を引き取ったのは、その約束を交わした日の夜だった。

信長はその翌日から自分を信じてくれた夫の望みを叶えるため、今まで戦ってきた――

そして――――

戸の外からは剣戟、怒号。鼻孔を突き、彼女の身体を撫でるのは炎。右肩には矢が刺さり、赤き血がとめどなく溢れ出ている……

「本能寺……ここが、オレの最期の地か」

戸を開き、窓から見えるのは『水地の旗に白桔梗』の紋。アイツ（日向守）が刃を向けてくるなんて夢にも思わなかった——

「認識が甘かったって事だろうな」

1万余の反乱軍に対し、彼女を守るのは100名ほど。小姓衆が戦ってくれているが、全滅は時間の問題だろう。

「アイツ（吉乃）はオレの物。オレはアイツの物だ……髪の毛一本だって、誰にもくれてやるものか」

信長は脇差を抜き、自らに突き立てた——肩からの傷とは比べ物にならぬほどの激痛と、薄くなっていく意識の中で、信長は最期に詫びた。

（思えば、短い夢だったな……悪い、吉乃。お前との約束、果たせなかったな——）

——いいえ、キミはよく頑張りました。僕との約束をしっかりと果たしてくれました——

意識を失う直前、懐かしい『誰か』の声を聴いた気がした——

1582年に明智光秀によって起こされた軍事クーデター『本能寺

の変』。発生までの経緯については現在でも様々な説が取り沙汰されている謎多き事件である。焼け落ちた本能寺から明智軍が総出で信長の遺体を探したが、見つからなかったという。

（榊原康政編）

地球温暖化が叫ばれる現代日本でも、戦国時代でも夏はもれなく熱いものらしい。城下町を康政と歩き、手拭いで汗を拭きながら聖一はそんな事を思った。

「暑いね」

隣を歩く小柄な少女――榊原小平太康政もいつもの元気よさは鳴りを潜め、ウンザリした様子である。輿にさげている竹筒から水を飲んで、水分補給しながら聖一を見上げて口を開いた。

「ねえお兄ちゃん。ところでどこに行くの？」

「ああ、そういえば話してなかったけ？ちよっとしたお使いだよ」目的を話さなかったというよりも、城門から出ていく聖一を見つけた康政が『お兄ちゃん弱つちいからボクが護衛してあげる！さあさあ早く早く！』と言って同行を申し出て、話す間もなく引きずられていったのだが。

「お大の方様にお気に入りのお茶菓子を買ってくるよう命じられてね。そのお使いだよ」

「お大の方様、甘いものが好きだもんね！ボクもお茶の相手をさせて頂くことがあるんだよ♪」

先ほどから彼らの会話に出てくる『お大の方様』とは家康の実母で、実家と婚家の政治的な理由で夫と離縁させられた後は、久松俊勝に嫁いでいた。しかし桶狭間の戦いの後、夫の俊勝は家康に合ごうりき力し、三河国西郡の城主となっていた。そして現在、お大の方は俊勝の勧めで娘（家康）と一緒に暮らしている。

「あ、そこのお店なんだよ」

聖一が一軒の店を指さすと、隣を歩く少女の口から小さく「うげ」という声が漏れた。振り返ってみると、康政はひきつった表情を見せていた。

「・・・どうしたの？平ちゃん」

「い、いや？なんでもないよ？」

聖一はそんな康政の様子に首をかしげながらも、店の中に歩みを進めた。康政は迷っている様子だったが「待ってよー」と後に続いた。

「はい。話はお城から伺っておりますゆえ、少々お待ちを・・・」
対応に出た店主にお大の方からの使いと名乗ると、商品を取るために奥に引っ込んでいった。店主を待つまでの間に店内で腰かけて待っているとお盆に湯のみと団子が乗ったお皿を乗せた少年がやってきた。彼は確か店主の息子だったと記憶している。

「鷹村様、どうぞ」

「ああ、ありがとう」

彼は慣れた様子で、聖一にお盆を差し出す――しかしお茶もお団子も1人分だ。

「ねー！五郎！ボクのはー！？」

その事に気が付いたのか、康政が少年に向かって叫んだ。

（そうそう、康政のは・・・って『五郎』？）

康政に『五郎』と呼ばれた少年は、振り返ると少女に向かって舌を出した。

「へーんだ！小平太、お前にやる菓子なんてねえよーだ！」

「な、なんだとー！」

『むがーっ！』といった様子で立ち上がった康政は、指を五郎と呼ばれた少年に向けて突きつけた。

「五郎、表に出ろっ！この間の決着をつけてやるっ」

「上等だ、小平太あ！」

康政は肩を怒らせて出ていき、五郎も前掛けを投げ捨てて店を出て

いった。いきなりの展開について行けず、聖一はその背を視線で追うしかできなかった。

「・・・2人とも、怪我するなよー」

でも2人の間には嫌悪感ではなく、言うならば『喧嘩友達』といった雰囲気を感じ取ることができ、自然と笑みが浮かんだ。

「うふふ、そうなのよ。『大須賀屋』の息子の五郎君と平ちゃんはとっても仲良しでね♪」

城に戻った後、お大の方のお茶の相手をしながら先ほどの顛末を話すと、彼女はニコニコと笑みを浮かべながら口を開いた。

お大の方は恐らく30半ばほどの年齢ながら、少女のように無邪気な性格でコロコロとよく笑う。天真爛漫とはこの方の為にある言葉なのかな、と聖一は時々思う。

「そうですか。平ちゃんもああいう自然体でいられる同い年の友達がいる事は、とてもいい事だと僕も思います」

徳川家の中でも康政に近い歳の者はいないわけではないが、彼ら彼女らは康政を武将・榊原康政として扱う。彼らは表面ばかりで康政の内面を見ている者が皆無なのだ。そう言った意味では、五郎の様な感情をぶつけ合う人物は貴重だし、その友達を大切にしたいと思う。

（あいつは・・・なんで僕を憎んでいたんだろう）

現代日本に残してきた友達『だった』男を思い出す。昔は弓のライバルとして切磋琢磨してきたはずだった。それがある日を境に彼は自分を憎むようになった――

「あら・・・？どうしたの、聖一君？」

お大の方がキョトンとした様子でこちらを見つめてくる。それに「

なんでもないです」とだけ返した。

〱榊原康政編〱（後書き）

さかきばらやすま
榊原康政（1548～1606）

徳川四天王の1人で徳川十六神将・徳川三傑にも数えられる功臣。
通称は小平太^{こへいた}。後に従五位下式部大輔^{じゅうごのげ しきぶだいゆう}に任ぜられる。1548年に
さかきばらながまさ
榊原長政の次男として生まれた。兄に榊原清政^{さかきばらきよまさ}がいるが、病弱だっ
た彼を差し置いて榊原家の当主となる。

三河一向一揆鎮圧戦での武功を皮切りに、主君家康とともに数々の
大戦に参戦して勝利に貢献。家康の関東移封後は上野国館林城^{たてばやし}（現
在の群馬県館林市）を任される。関ヶ原の戦いでは家康本隊と離れ
て秀忠隊に属し、武功を挙げることは叶わなかった。この後、家康
から水戸への加増転封を打診されるが、上記の理由に加えて館林か
らの方が江戸（徳川家居城）に参勤しやすいという理由で辞退する。
この態度に感銘を受けた家康は『自分は康政に借りがある』という
神への誓いを証文として彼に与えた。そしてこの証文が後に將軍家
の逆鱗に触れた榊原家を窮地から救う事になるのだが、これは彼の
与り知らぬことである。

この作品では徳川家の元氣印・マスコットの存在として登場する。
聖一によく懐き、彼を兄として慕っている。

おおすかやすたか
大須賀康高（1527～1589）

通称は五郎佐衛門。史実では徳川家康の家臣として登場するが、始
めは榊原康政とともに三河一向一揆で一揆方に付いた酒井忠尚に仕
えていた。しかし忠尚が家康に背くとこれに従わず康政とともに家
康に味方する。

高天神城の戦いや天正壬午の乱、小牧長久手の戦いなどで活躍し『
徳川二十将』に数えられる人物である。同僚だった康政は娘婿でも
あり、娘が生んだ子・忠次が大須賀家を継いだ。

この作品では和菓子屋の息子、康政の喧嘩友達として登場する。今

後、本編でも登場する予定。

〵切欠(上)〵(前書き)

登場人物紹介

なすの
那須野ひかり

聖一の幼馴染の少女。髪型は黒髪ショートボブ。常に明るくテンションが高いので、男性・女性問わず人気があり、交友関係も広い。

く切欠（上）く

日本のとある地方都市の一角に、大きな古い屋敷がある。この地に戦前から住んでいるこの家の主の姓は『鷹村』と言い、弓道場を営んでいる。

ある日の朝。この家の勝手口が開き、一人の少女が姿を現した。この付近の高校の制服を身に纏った、黒髪をショートボブにした活発そうな印象の少女である。

「んゝ♪今日も侵入成功だねっ！」

鍵を指でくるくる回して得意げに鼻歌を歌う少女。この不法侵入者の名は那須野ひかり。鷹村家の隣に住む女子高生である。

彼女は慣れた様子で玄関の鍵穴に鍵を突っ込み、くると回す。鉤が開き、カラカラと古めかしい引き戸が開かれて木造の日本家屋の玄関が姿を現す。光は靴を脱いでそれをキッチンと並べると、足音を忍ばせて廊下を歩く。

そして辿り着いたのが一階奥の和室。音もなく引き戸を開け、敷かれた布団に目的の少年が眠っているのを発見すると、ニンマリと笑みを浮かべる。カバンを置き、静かに近寄って――

「お――――」

跳躍。そして――

「きろ――――！」

「ぐへえっ！」

ものの見事なボディプレスが、少年――鷹村聖一を押しつぶした。

「もー、いい加減にしてよね、ひかり・・・」

「あははっ。いやー、どうしてもこればかりはやめられなくてねっ！毎朝お天道様と一緒に起きちゃうのさっ」

時刻は午前5時を回ったところ。普段、聖一は鷹村の本家に出向いて不在の両親に代わって弟妹に朝食と弁当を作るのだが、それでも6時半起床だ。

「それにしても、いつもごめんね。うちの両親、出張しているから・・・」

「気にしないでいいさ。ひかりのご両親にはいつもお世話になっているからね」

ひかりの両親は海外に出張しており、日本に帰ってくるのは稀だ。その間、那須野家では料理を作れる人物がいなかったため、こうして朝昼晩と彼女は鷹村家で御馳走ゆきになっているのだ。

「はい、出来たよ。悠ゆうと美樹みきを起こしてくるから先に食べててね」

「はーい。いったただきまーすっ！」

エプロン姿の幼馴染を見送って、ひかりはトーストをパクついた。

弟妹2人を送り出した後、準備を整えて聖一とひかりは家を出た。高校までは徒歩10分ほど。2人ならんで他愛無い会話で歩く。初めて出会った小学生の時から10年間も続けてきたやり取りだ。

「ねねね、知ってる？最近広まってる『新・学校の怪談』」

「・・・学校の怪談に新も旧もあるの？まあいいや、なにそれ？」
ひかるが説明するところによると、ここ数日夜の誰もいないはずの学校の図書館のカーテン越しに誰かが動くシルエットが映ったりしているという。

「噂では、昔校内で自殺した本好きの学生の霊が徘徊しているんだ

つてゝ！」

「ひかり、なんでそんなに嬉しそうなの？」

「なんかワクワクしない!？」

「・・・不謹慎じゃないかな」

こんな何でもない会話、何でもない日々が続いていく――

そう、信じていた。

その日の晩、本家に呼び出された父から驚くべき言葉を聞かされるまでは。

――本家の当主の息子が、秘蔵の書を盗んで失踪した。

く切欠（下）く（前書き）

藤津栄治ふじつえいじ

鷹村家の本家筋の当主の長男。聖一同様弓道を嗜んでいるが、その腕は聖一にはるかに劣っており、そのことから彼に嫉妬と劣等感を抱いている。プライドが高い。

く切欠（下）く

鷹村家の本家当主の姓は『藤津^{ふじつ}』という。昔から弓で生計を立てていた鷹村家同様、藤津家も大名家の弓道師範を務めてきた。

その藤津家の当代当主の一人息子・藤津栄治^{ふじつえいじ}も幼いころより弓道を嗜んできた。しかし残念なことに、彼は弓の才能には恵まれなかった。

弓の老舗の家柄に生まれながら、弓の才能に恵まれなかったという劣等感に輪をかけたのが、同い年の聖一^{せいいち}の存在であった。

分家の出でありながら同世代でも卓越した弓の腕を持つ彼の存在は、彼に暗い影を落とした。

（くそっ・・・分家のくせに、俺より優れているなど許せん！）

栄治は『ある場所』で息を潜め、時間が来るのを待っていた。あともう少しで日付が変わる。『侵入』の為に確実に邪魔が入らない時間を待っていた。

（あいつさえいなければ・・・俺は他の分家のクズ共から後ろ指を指されることもなかったのに！）

幼いころより、なんどやっても聖一には勝てなかった。天賦の才というものがあるのだろうか、栄治がどれほど努力しても彼には勝てなかった。

「消してやる・・・」

彼が手に携えている古そうな書物。その表紙には『時空書・基礎編』と書かれていた。

「うぐっ！」

建物に侵入した栄治は見回りをしていた守衛の男性を気絶させて鍵が開いていた部屋に放り込むと、不法侵入したとは思えぬほどの堂々たる足取りで目的の場所まで歩く。調べた結果、この建物の深夜の守衛は1人のみであった。その1人さえやり過ごせば、侵入はし放題であった。

「さてと・・・消えてもらうぜ、聖一」

彼が立ち止った目の前にそびえる引き戸。その上に取り付けられた木の板にはこう記されていた。

『古書保管室』と。

藤津家にはこんな昔話がある。

——— 遠い昔・・・藤津家の当主に娘がいた。

それはそれは大層美しい娘で、後漢を起こした劉秀を指す言葉として知られる『嫁を娶らば・・・』とは陰麗華いんれいかではなく、藤津家の地元では彼女を指したほどであったという。

美しく聡明で、誰からも慕われた彼女はやがて長じて近隣の有力な大名家の嫡男の正室として嫁いだ。子宝にも恵まれ、優しい夫との間で穏やかな時間が流れて行った・・・

しかし、彼女をよく思わない人間もいた。それは彼女の夫の母であった。彼女は若い時からその美貌で知られた人だったが、同時に自尊心の高い人でもあった。

自分よりも美しいと評判の藤津家の娘に嫉妬した彼女は、嫁を消し去ることに決めた。しかし、ただ殺すわけにもいかない。彼女は息子の嫁・・・大名家嫡男の正室が殺されたという醜聞を広めるわけにはいかなかった。

そこで彼女が藤津の娘を確実に消すために用いたのが『時空書』。

対象の人物を時空の彼方に消し去る方法が記されているといわれている呪術書……

藤津家の歴史書を紐解いてみると、その娘がある日突然姿を消したと記されてある。栄治はそれを『時空書』の呪術が成功して消されたのだと考えていた。

栄治が『ある場所』に侵入したのと同じ夜、聖一は学校の寮の一室にいた。自宅暮らしの彼だが、学校の寮に友人がいるのでたまに泊りがけで遊びに行く事があるのだ。今日は弟妹が学校の自然教室でしばらくいない事と、久しぶりにひかりの両親が帰ってきたため、聖一は家を空けて友人の部屋に遊びに来ていたのだった。

「ふ、あゝあ……聖一い、そろそろ寝ないかあ」

「ん、そうだね。もう3時か……」

基本的にこの学校の校則は緩い。寮生以外でも許可をとれば宿泊が出来るし、布団を用意して貰える。その上テレビゲームなどの娯楽の品も持ち込むことができるのだ。

「明日も学校だしな。いい加減寝ないときついぜ」

「そうだね、おやすみ……」

友人がベッドに上がり、聖一も用意された布団に潜り込んだ。電気を消すと、すぐに寝付ける友人の寝息が聞こえてくる。聖一も横になり、明日に備えて目を閉じた……

「やっと見つけたぞ・・・」

栄治はこの数日、深夜の学校に忍び込んで探していたものがあつた。実は図書室で探し物をしているときに映っていた影がひかりが言っていた霊なのだが、そのことを彼女が知ることはないだろう。

彼が手にした本。これもまた古めかしい本で、表紙には『時空書・実践編』と記されていた。栄治が実家から持ち出したのは、時空を旅する為には何を用意したらよいかなどの説明書。今回の書はそれを用いて時空の扉を開けるための方法である。この2冊がないと意味をなさないのである。

栄治は途中で購入したナイフを取り出して、基礎編を見ながら図形を床に刻み、次に実家で密かに用意していた儀式に必要な材料を燃やした粉を図形の隅に盛っていく。

「まったく・・・面倒なことさせやがる」

悪態をつきながら、彼は作業を続けていく。最後に自分の血を垂らして、図形の中心に対象の人物の名前を書く。

「そして、この・・・実践編に書かれてある呪文を唱えれば、終わりか・・・」

彼はしっかりと『鷹村聖一』と描き、図形の前に坐して実践編を開いた。そして、静かに呪文を唱え始める・・・

まだか。

まだ終わらないか。

呪文を唱え始めてからどれくらいの時間が経っただろう。さすがの彼も焦りが見え始めた。遠くから先ほど彼が打ち倒した守衛や、彼に呼ばれて駆け付けたのであろう、複数の人間の足音が聞こえる。間違いない自分を探しており、普段は人が寄り付かないのであろう、この地下にある古書保管室にも駆け付けるのは時間の問題かもしれない。

「——地下は探したか!？」

「いや、まだだ!」

(不味い!)

他の階は探し終えたのか、それとも人が増えて地下まで回る余裕ができたのかは知らないが、どうもここにも捜査の手が伸びたようだ。——だが、運は彼に味方したようだ。警備の人間が地下の階段を降り始める前に、呪文を唱え終えたのだ。

(そして最後に、消したい人間の名を唱える——!)

歓喜の瞬間が、訪れようとしていた——

「消えろ・・・鷹村、聖一」

唱え終わると同時に、図形が光りだした。確実に警備員が気が付くだろうが、そんなことはどうでもいい。図形の中心からゆっくりと菱形の穴が開き、星空を散りばめた夜空のような空間が顔を出す。だが——

(なぜ、オレの前に——?)

そう思う間もなく、

彼は掃除機のような吸引力を持つ穴に吸い込まれ、空間に引きずり込まれていった。

——実は時空書には『基礎編』『実践編』の他にもう一冊ある。それは『時空書・取扱説明編』という。鷹村家の地下書庫にあり、本家の栄治はもちろん聖一もその書庫の存在は知らない。取扱説明編はこう記されている。

『——実践編に記されている通りの方法では、自分も引きずり込まれる。図形の真ん中に記す場合の血は、時空空間に送り込みたい人間の血を使う事』

過去の藤津家当主に変わり者がおり、時空空間を旅することを趣味としたという。実は歴史書の娘が失踪した日と同日に、その姑も失踪したという。大名家の歴史書からも藤津家の歴史書からもは消されているが、自分の家のもう1冊の歴史書を見た彼はなぜ呪術をかけた姑も消えたのかを調べ、その理由を突き止めて記したのが取扱説明編である。

ともあれ藤津栄治と鷹村聖一は現代日本から消え、2人は現代版の神隠しとして日本中を騒がせることになるのだが、一風変わった日本の戦国時代に辿り着いた聖一には知ることのない話である。

く切欠（下）く（後書き）

今回のく切欠くの上下編は、聖一がどんな経緯でこの一風変わった戦国時代に降り立ったかを書いた物です。

徳川家康に拾われた聖一。さて栄治は・・・？

なんだか軽い感じで読んでいただくのがこの短編集なのですが、ちよつとシリアス寄りになってしまった・・・

ところでこの藤津栄治と鷹村聖一、そして那須野ひかり。

3人合わせて・・・（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1411y/>

月の光と葵の乙女～短編集～

2012年1月10日01時50分発行